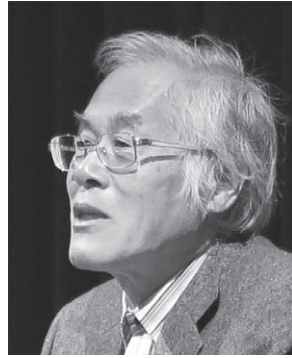


東京都交友会 秋の大会 一般公開講座

東京の近代化と建築

講師 藤森 照信 先生

(東京都江戸東京博物館館長)



現在私は江戸東京博物館の館長をしております、皆様には大変ご支援をいただきありがとうございます。今日はこういう席でお話できることを嬉しく思います。

近代化の課題

東京をどうするかということとは、明治の初期からずっと、大小の波はありますが、課題になっておりました。

江戸時代の都市、前近代の都市というのは、日本だけではなく世界中全て、閉じるように造られていたのです。これは外敵、日本の場合ですと国内のいろいろな戦い、ヨー

ロッパの場合だと異国との戦いですが、この為にヨーロッパの場合は厚い城壁を築いて、その中に広場を除けば隙間の無いような密集した都市を造っております。ですから交通の便というのは基本的に考えません。交通の便を考

えますと、そこから敵が雪崩れ込んで来ますから。ヨーロッパの場合ですと小さな城門を造って、敵が来たら農民たちも、そこに羊や牛を連れて入り込む。それが食料でもあるわけです。

江戸も基本的には同じことで、城壁は造りませんでしたけれども、十重二十重に堀とか石垣、それからいろいろな防御施設を造り、一番外側の防御施設というのは、お寺がその働きをします。だから西から来る道に対しては増上寺がその防御施設で、まずあそこへ立て籠もって、東海道か

ら来る敵を討ちます。あるいは上野の寛永寺は東北地方や信越方面から来る敵を討つための一種の陣地の働きをするわけです。そういうふうには、一枚の城壁で閉じていたヨーロッパに対して、日本は一枚一枚は弱いけれども全体としては強い防御施設で守っていたわけです。

ところが近代になると一気にそれが障害になります。近代になると都市がどんどん拡大し、それから交通が基本的に変わってしまうわけです。それまでは日本の場合ですと歩いていました。あるいは長距離は船で運んでいた。それに対して鉄道とか車というものが入ってきます。ヨーロッパの場合ですと、車は使っていたのですけれども、もつと大きな車が交差できるような道とか鉄道が必要になってくる。

前近代の都市というのは閉じていたのですが、それをどう開くか、交通網をどう開くかというのが大きなテーマになります。もう一つは新しい内容が出てきます。例えば行政施設

で、これは江戸時代の行政施設よりはるかに複雑な行政をやるようになります。それからマーケット、物流関係、さらに資本主義にふさわしいビジネス地区というのが必要になってきます。さらに商店街というのも新しくする必要があり。そういうふうには機能においても、新しい機能を入れたいといけないということが始まりました。

日本の場合では、その新しい機能は西洋館で造るということが、誰が決めたというわけではないのですけれども、わりあい早い時期からほぼ全員の合意となっており、そういう新しい施設を新しい表現で作るといふふうには近代化が始まるのですけれども、それがなかなか一筋縄ではいけません。理由は昔ながらの道路も

ありますし水道もありますし、それから広場みたいなものや、お寺もあります。そもそも人々の暮らしはそう昔と変わらないわけで、そういう中にいわば上から指導して変革をしていくというのが、日本の近代化の基になるわけ

です。

銀座の近代化

では東京の街をどういふふうには近代化するかというのが、内務省と東京府の大きな課題になります。当時内務大臣が一番上において、その下に次官がいて、その次官の次くらいが東京府知事だった。次官と警視総監というのが大体同格でした。それで、内務省の次官と東京府知事が考えることになるわけです。

銀座が明治5年の大火で燃えてしまい、火事がある限り東京の近代化はできないというところで、当時の東京府の役人の方には三島通庸という人がいて、政府の役人としては渋沢栄一とか井上馨がいたのですが、その人達が一緒に計画して銀座を造るわけです。これはもう滅茶苦茶な予算を一切無視した計画でした。基本的にはロンドンの商業地区を見本にした通りを造り上げます。歩道と車道の分離、それから街灯を付け、木を植えました。今と違うのは、並木道が車道側にあります。これが明治5年から、10年

で終わり、銀座は完全にヨーロッパ風の街になりました。

これによって何が起きたかというところ、それまで小売地区、いわゆる普通の商いは日本橋が中心だった。それが、どんな銀座に新しい店が入るようになり、現在の銀座の服飾時計店とか、アンパンの木村屋さんとか、ああいう今も続くヨーロッパ系の物をやる商売というのは、ここ銀座がもともと財を成していきます。明治の末ぐらいには大体日本橋を抜く。結構時間がかかるのですけれども、まあ日本の商店街とすることができるとになります。

都市計画の始まり

それで、今に直接繋がる都市計画というのがで始めるのは明治20年の直前ぐらいです。明治20年で日本は、経済的には大体産業革命を完成、軌道に乗せます。それから内閣ができる、憲法ができる、ということが明治20年の前後で、政治も経済も新時代の体制が整いました。その段階で、東京をどうするかということ、を東京府が考え始めまして、

明治17年に「市区改正芳川案」というのができます。

この芳川頭正は当時の内務次官で、内務省の鉄道技師と一緒に組んで東京の案を作りました。これは、基本的には、既存の道を拡げる。それから、新橋まで鉄道は来ていたので、上野との間を繋いで、日本列島縦貫鉄道を造るということで、この計画は相当時間がかかりましたけれど実現することになります。

この案では、今の東京駅の位置に東京駅を造る。だから明治17年の案はその後実現することになります。道路も、既存の道路をだんだん拡幅するということ、今の日本橋の大通りですね、あそこを拡幅する。こういう計画を作るわけです。これは市区改正計画といまして、戦前、大正9年の前までは都市計画のことを市区改正と言っていたのです。

ただ計画図を見ると、「旧江戸の朱引」と書いてあり、計画はそこにある。要するに、江戸よりでかくなるとは思っていないのです。江戸は

いろいろな説があるのですけれども、大体150万人はい

ただろうと言われています。明治政府はちゃんとした人口統計を取りませんが、東京は60万です。だから3分の1から2分の1くらいに減ってしまつて、それが産業革命が起こつたり、新しい政府ができて新しい政策を立て、だんだん東京に人が戻り始めるのですけれども、それでも江戸時代ほどは戻らないと考えている。人間とは面白いもので、

新政府はこれから新しい時代を作る、体制も固まつた、もう経済も政治もなんとかちやんと進み始めた段階でも、自分達が倒した幕府ほどはでかくなれないという、そういう前提でやっているわけがございいます。ただでかくはならないけれども、鉄道計画とか道路計画、そういうものはちゃんとやろうという、そういう段階の計画をやっております。

これが芳川案でございまして。これがそもそもその基になつて、政府の中で政策的に計画を立てるようになってまいります。

渋沢栄一の兜町ビジネス街

こういうふうには東京の都市をどうするかというイメージが出てきますと、いろいろな人たちが動きを始めます。それで面白い動きをしたのが、政府と直接は関係ない民間人であつた渋沢栄一でございまして。渋沢栄一自身は、スタートはもろろ徳川幕府の幕臣で、最後の將軍のいわばブレンミみたいなことをしていたわけですが、非常に優秀だつた、経済に長けていたものですから、すぐ新政府に抜かれました、大蔵省に入つて実質的にいろいろな計画をします。いわゆる会社という言葉も、株式会社という概念も、その制度を作つたのも渋沢栄一でございまして。それで株式会社の中核になるのは銀行だということで、彼は自分で銀行の頭取になる。これが第一国立銀行という国が作つた最初の銀行です。

彼は、政府から道路を拡幅する交通中心の芳川案というのが出たのに対して、それでは満足がでなかつた。交通網を新しくするのは良いけれど、

でも、ではビジネスをやっている人達の場所をどうするのだ、政府はそこを考えていないと思つた。それに対して渋沢は、もともと大蔵省の中核にいた人で、政策とかいろいろなことを良く知つていましたから、だつたら自分でやるということ、ビジネス街を自分で作るということを始めます。

彼の基本的な考えは二つありまして、一つは横浜の港を東京に移そうということ、

横浜というのは外国、幕府が作つた港で、関税と裁判権は外国人が握つていた。だからそれを不平等条約というのですけれども、その不平等条約のもとである横浜を放つておくわけにはいかない。それよりも、それも横浜に港があるというのが遠くていい。それで東京に港を造るといふ、築港計画です。

もう一つは、商業地区と、この港に隣接して兜町に商業地区を作ろうというのが渋沢

の考えでございました。

渋沢は当時の民間のビジネスの指導者で、渋沢の案の中心は渋沢邸です。ここに自分
がまず住んで、この横に株式
取引所、それから商業会議所
それから、島田、小野、三井
という三大財閥。それから第
三十五銀行とか三井物産です
ね。三菱会社と日本郵船、明

治生命、東京海上、日経新聞、
東京経済雑誌、これはもう潰
れましたけれども、明治期に
わりと力があって、特に渋沢
栄一に非常に影響を与えた新
聞です。また、第一銀行、王
子製紙、これは渋沢が作った
会社でした。

こういう民間企業を集める
だけではなくて、銀行集会所、
今の銀行協会、それから先程
言いましたように株式取引所
と、商法会議所というのは現
在の東京商工会議所。それで
公園やオペラ座を造ります。
こういう大計画を立てて着々
と進めたわけです。それで、
これらは全部ここに集まっ
て、まあ戦前までの段階の主
要な、日本の資本主義をリー
ドした民間会社、それから経

済組織というのは全部ここに
集中したわけです。

これが渋沢栄一の考え方。
渋沢は東京を商業都市として
作ろうと考えたわけです。こ
れを僕は兜町ビジネス街と
言っていますけれども、これ
が全部集まって、現在は株式
取引所だけがここに残ってい
ます。

**ビジネス街と港―ベネチアの
イメージ**

経済的な中心が港の横にあ
る必要はあまりありません。
近代においては、フランスな
どは内陸に都市がありますか
ら、港との間は繋がれば良いわ
けでございます。ただ渋沢の
場合は、とにかく港の横に経
済の中心が一緒にあるとい
う、一体化してあるというこ
とが大事だと考えました。

このイメージの基になっ
たのはベネチアです。当時ベ
ニス経済の中心でも何でも
なかったのですが、ベネチア
は中世からルネサンスにかけ
てヨーロッパとイスラム圏の
交易の中心として栄えた港で
す。そして自治都市だった。
ベネチア共和国といって、自

分で軍隊も持つてちゃんと
守っていて、独立国家だっ
た。そこであれだけの繁栄を
した。それに渋沢はやっぱり
憧れていたわけです。

渋沢自身はどういうことを
したかという、先程の渋沢
邸はベネチアンゴシックとい
うスタイルです。この洋館の
中で彼は商業都市のリーダー
として活動をしたわけです。

銀行協会、東京海上、明治
生命、これらは全部、後に東
京駅を造る辰野金吾が渋沢に
頼まれて、ベネチアのスタイ
ルを中心に造っております。

こうやって渋沢は東京を商
業都市にしようということを
考えます。それについては全
然悪いことではないので、内
務省もこういう実際の都市計
画を協力してやっていくわけ
です。

ところがこの港の計画が
横浜の反対で潰れます。横浜
外国人居留地の商人達が、政
府にもものすごい圧力をかけま
す。当時の内閣はやはり外国
との間でぐちゃぐちゃやられ
るのを本当に恐れていたので
す。欧米が強かったというこ

ともあるし、不平等条約と
いうものすごく複雑な交渉を
やっていますから。それで政
府は築港を諦めます。

それで、政府がいつ東京に
港を造つてよいと決めたかと
いうと、第二次大戦です。直
接兵員を東京から送りたい、
いろいろな物資を直接東京に
荷揚げをしたいということ
で、陸軍が圧力をかけ、中心
になって東京の築港をする
ということになります。

戦後の東京の自治に大きな
働きをした磯村英一さんに聞
きました、その時に、横浜
市は港を東京に移すことに一
応納得した。でもどうしても
納得しない勢力があった。港
湾荷役を握っている勢力で、
そういう勢力に軍が直接行っ
て何かやるわけにはいかな
いので、密かに磯村さんが軍の
若い人を連れていって向こう
の親分達と交渉し、向うもこ
の交渉は軍との交渉だとすぐ
にわかるわけです。それで横
浜の権限の一部を東京に移す
ことに納得してくれたと磯村
さんは仰っていました。都市
計画というのは複雑な問題も

絡むわけでございます。

丸の内ビジネス街

渋沢の計画は港がなければ
成立しない、港があつてこそ
兜町は意味があるわけです。
それでもうこれでは駄目だ
ということ、渋沢も納得する
のですけれども、ビジネス街
を兜町から丸の内に移そうと
いうことになりました。

政府の市区改正委員会で、
兜町のビジネス街は未来がな
い、新しいビジネス街を作ろ
うということで、丸の内に決
定するので。そのときに、
これは民間に払い下げる、た
だし一筆で払い下げる、小割
はしないというという条件に
なりました。それで渋沢とか
三菱とかそういういろいろな
グループが連合して一筆で払
い下げを受ける予定だったの
ですが、途中で三菱が「自分
は自分だけで払い下げを受け
る」ということを言うわけで
す。渋沢のグループは渋沢を
中心に三井とか大倉ですが、
ものすごいお金が必要だった
ので、結局、できなかったの
です。それで三菱だけが一筆
で払い下げを受けまして、口

ンドンを一応念頭に置いて丸の内を作り、明治27年からできていきます。

官庁集中計画

こういうふうにはビジネス街というのは、当然政府の許認可、同意が必要なのですけれども、民間中心で行きます。これに対して、明治19年になりまして、政府は、商業地区ではなくて東京全体をもっと決定的に改良したいという計画を立てることになります。

これは誰が立てたかというのと、外務省が立てた。条約改正をやるためには、日本とヨーロッパが対等の必要がある。ヨーロッパは、対等になるためには日本の文明の度合いを対等にしろという、ほとんど言いがかりです。不平等条約改正をできるだけ先送りしたいのです。

それを真に受けた井上馨が、銀座レンガ街を作った人ですが、あの方はもう本当に面白い人、とにかくイメージ重視の人で、だったら東京をパリのようにしてやろうじゃないかと計画を作りました。できたばかりの伊藤博文の初

代内閣がこれに同意するので。だったら東京をパリのようには作ろうと、それは鹿鳴館政策と言われるものですが、鹿鳴館を東京中に、全国に拡げようという、とんでもない計画でございました。

でもそれについて一応、理屈も言っておりまして。普通の人達に新しい時代とか新しい時代の方向を見せるには目に見えるものを変えなければ駄目だというのが井上馨ともう一人、三島通庸という人の考えだった。要するに大衆をちゃんと納得させるには、目に見えるものを変えないと駄目だということを言って、それを本気で大規模にやってみようというのが、三島・井上の計画だったのです。

この官庁集中計画が明治20年に立案され、途中までやるのですけれども、条約改正交渉の効果があまりないので。途中でやっぱりこれ以上はもうできない、他にお金を回さなければならぬことがいつぱい出て、挫折します。

この計画というのは非常に不思議で、外務省の井上馨

が中心で、内務省の警視総監だった三島通庸も一緒にそっちへついてやるのですよ。それに対して内務大臣の山形有朋と次官の芳川顕正はあくまで道路計画で行こうとするので、内務省の中が二つに分かれる。大臣と次官は道路計画、交通計画で行こうとして、その下にいる警視総監と外務大臣はパリのように作るという計画、帝都としての体裁を整えるという計画で走るわけですよ。

それで最初のうちは帝都を造ろうという計画が先行するのですけれども、その計画は大体4年位で終わってしまいう。条約改正交渉が不成立に終わったところで、井上は責任を取って辞めます。それとともにこの計画もポシャって、じつと我慢していた内務省の道路交通網を中心に東京を新しい都市にしようという計画の方が主流になります。これが市区改正計画というもので、これがずっと現在の都市計画の基になっていきます。

見かけを重視する計画も一

応ある程度実現したので。国会議事堂は計画は実現していませんがドイツ人が仮に木造で造りますし、司法省、最高裁、海軍省を造り、その横にヨーロッパ風の公園を造ろうと、日比谷公園が出来ます。けれど全体を変えることには至らない。

一方、交通計画を中心とした内務省の方は、兜町ビジネス街を丸の内に移すことは無事に成功しますし、東京の道路を少しずつ拡げていくのです。わりと地味な、道路を中心とした土木的な計画なのですが、それが結局東京の基本になっていく、いろいろな計画が入り混じる中で、最後にそれが生き残って今に至るということになります。

日本の都市計画とは

明治の人達はいろいろな夢を東京に見たのです。江戸をどう近代化するかについていろいろの夢を見たのですけれども、渋沢栄一は商業都市にしよう、ベニスのようにしようとした。それに対して井上馨達はパリのようにしよう

した。内務省の芳川顕正達は、

ちゃんとした道路を造ろうとした。その三つが大きく出たのですけれども、道路も水道もちやんと造ろうという、いわゆる都市のインフラを造ろうという計画が最後に勝ち残りました。

官庁集中計画なんてある時期ワーツと出てきますし、渋沢の計画というのも商業都市でガーツと出てくる。けれども最後にインフラ整備というのが東京の中心的な勢力として、いわゆる土木系を中心とする東京の計画が主流になって、恐らく今に至ると言ってもよいと思います。

ただ忘れてはならないのは、それ以外の夢を結構本気で見て、ある程度は実現した。いくつかのものが現れて、商業都市的なイメージも、あるいはパリのようには作ろうという計画も、消えたかというところなことはなくて、その中心になるものはありますが、そこに他の思想も入って、何か全体としてバランスを取ってできていくということでございます。

日本の都市計画の一種の特

徴ですけれども、全体像がよくわからないけれども、結構良くできているといいう、その象徴が山手線です。山手線は世界から見ると夢の鉄道なのです。都市の中に環状鉄道がぐるぐる回っていて、全部の交通網が新幹線を含めて全部そこに繋がっている。特に上手なのは、山手線の中心は国が持つていて、そのポイントから出る線は私鉄が持つているわけです。小回りの利かない国の鉄道と、小回りが得意な民間が繋がっているという、上手なやり方ですね。

いつ誰が計画したかわからないのです。いろいろな鉄道をだんだん造っていった。おまけにそこに中央線というのも走っている。それぞれ別の理由で造られたものです。それで、大正 3 年に東京駅を造り、最後に新橋と上野を繋いで山手線が完成した。

いろいろな国がああいうものを造ろうと思うのですけれども、今更それはできないのです。パリとかニューヨークとかに比べると、何かよくわからないけれども、中心には

相変わらず江戸時代からの緑地とシンボルがおわします場所もちゃんとあるわけで、その周りになんとなく広がって、でもなんとか実質的には 3 千万から 4 千万の居住地域をコントロールしているわけです。誰が決めたかもわかりませんが、なんとなくバランスをとっているという、それが日本の都市計画かなというふうに私は思っております。

編集部から

藤森先生のご講演では多くの画像や計画図が用いられましたが、紙面への掲載は難しいため省略し、これに伴ってご講演の内容も整理しました。ご了承ください。

ご講演の際の資料は交友会事務局にありますので、ご覧になりたい方はご連絡ください。

無料 法律・税務相談の日程

相続問題、借金問題、成年後見人問題、相続税対策、確定申告など、法律・税務問題でお悩みはありませんか。当会会員である下記の弁護士、税理士の先生方が、親切丁寧に相談をお受けします。お気軽にお申込みください。

なお、相談日の 3 日前までに、必ず予約をしてください。

◆無料法律相談◆

(平成 30 年 午後 1 時 30 分～3 時 30 分)

- 2 月 14 日(水) 担当弁護士 山下一雄先生
- 3 月 12 日(月) 担当弁護士 金岡 昭先生
- 4 月 11 日(水) 担当弁護士 山下一雄先生
- 5 月 14 日(月) 担当弁護士 金岡 昭先生

◆無料税務相談◆

(平成 30 年 午後 2 時～3 時 30 分)

- 2 月 8 日(木) 担当税理士 大西萬里子先生
- 3 月 8 日(木) 担当税理士 大西萬里子先生
- 4 月 19 日(木) 担当税理士 大西萬里子先生
- (5 月はありません。)

1950 年創刊 都政にこだわる専門紙

これに月額プラス 100 円で電子版もご利用いただけます
電子版では、2008 年 5 月以降の紙面をパソコン、スマートフォンから
もご覧いただけます

購読料月 1,730 円(税込)

詳しくは、電子版ホームページをご覧ください
www.tosei-d.com

都政新報

都政新報社 販売部

160-0023 新宿区西新宿 7-23-1

電話 03(5330)8781

FAX 03(5330)8808

ホームページ www.toseishimpo.co.jp